

『旅行用心集』に見る“江戸時代”の旅人と温泉の楽しみ方

安達清治

はじめに

『旅行用心集』（八隅蘆庵）は、江戸時代（1810年）に発行されている。（現代版は桜井正信監修本）

同書は、文字通りに江戸時代の、庶民のための初めての旅行の情報集である。旅行の安全（危機管理から衛生まで）の守り方、旅行の楽しみ方をまとめた旅行のための“バイブル”書であった。徳川家康によって全国が統一されたのは1603年で、江戸に幕府を開いた。幕府が開かれてから社会の安定が図られ、200年たつてからこの情報の本が出版されたことは、ようやく多くの庶民の旅が実現したことを意味しているものの、旅の安全は全て自分で守らねばならなかった。

この書物が発刊された背景は、旅の実現には、社会の安定のほかに、庶民の経済の向上が不可欠であったものの、さらに、旅ができる街道や宿場などのインフラストラクチャーが整備されていなくてはならない。これらの条件があってこそ庶民の旅が実現している。

この旅の実現は、今日の日本人の旅のDNAとなっており、例えば、旅の恥の搔き捨て行為や、御土産購入の好きなこと、今日の日本人の旅行用品のバラエテーサー等でも明らかである。

人気の高かった温泉旅行については、諸国の温泉地292箇所を紹介している。江戸時代に全国に温泉地があり、湯の効能についての記述があり、もっぱら湯治としての利用であったものの、癒しの場としての温泉の利用もあった。

しかも、温泉利用は主に衛生面から、安全面等から記述されているが、「用心集」のほかには江戸川柳の“古川柳”によっても、庶民がいかに温泉を利用したかを実

証できる。古川柳では、庶民によって作られたわずか17文字でつくる文芸であり、当時の社会では世界で最大の文化を楽しむクラブ組織—“連”のクラブがあった。例えば、古川柳¹⁾に「初の旅 渡天のごとく思うなり」がある。庶民にとっての旅は唐やインド（当時の外国行きではもっとも遠距離であった）に旅をするごとくであった、とみている。

江戸時代の旅はどのような社会的な構造で実現したのか、いかに庶民が実行したのかを『旅行用心集』から考察し、また、庶民がどのように湯治への旅をしたかを古川柳から考察したものである。

「旅行用心集」とは

この書が発刊された年は、1810年で、伊勢神宮参拝客が年間200万人達成や、十辺舎一九のベストセラー小説である『東海道中膝栗毛』も発刊されて、旅行ブームとなっていた。現在の協定旅館に当たる「東講」などの団体指定の旅館組織も誕生している。

江戸時代の旅は、基本的には人々は移動の禁止となっていたが、伊勢神宮等の寺社参拝の旅、病気の治癒のための湯治の旅は認められていた。しかも、移動には基本的には歩くこと（1日平均30キロ）であった。長期間の旅の道中は、トラブルや危険なことが待ち受けていたことは想像に難くない。庶民にとってセキュリティー対策のマニュアルは必要だった。

旅行用心集は、61か条あり、冬の旅、船の旅、かごの旅、風呂の利用の仕方、所持品、道中日記の使い方、古い唄とことわざ、旅行教訓歌、旅たちの歌、諸国の温泉292箇所、諸国の関所について記述している。

用心集61か条では、宿と安全対策、道中の安全対

1) 古川柳は柄井川柳選による「誹風柳多留」の作品をいう。

策、道ずれ人の対策、温泉の利用対策、食事の安全対策、渡し舟あるいは川越の対策、その他の対策となっている。「宿では第1にその地の東西南北の方角を聞き定めて、次に家作、雪隠、裏表の口々などを覚えおくことは古き教えなり」と旅人の心構えを説いており、このうちで、道中の安全対策、道ずれ人の対策、温泉の利用対策は注目される。

道中の安全対策には多くの章を割いている。「山中や野道などで若い女性や、女道ずれに会ったときは、挨拶はするがそれ以上の入らぬ話をしない。揉め事は些細なことから起こるからである」、「道端や畑でつくられているなし、柿、みかんなどの果物など、どんなに実っていても、手を出してはならない。村の中で五穀はもちろん、村に干してあるものは踏んではならない。知らぬ土地で文句を付けられることがあっては、こちらが正しくても勝ち目はない」（どこで誰が見ているかわからないし、梨花の下で冠を直さないと、疑いをかけられないようにたとえがある）。

「途中で、けんか、ばくち、囲碁、将棋、村の踊り、村の相撲、変死人、殺しの場面など、人だかりがしているところ、ぶつそうなところは、検討をつけて素通りすること」トラブルに巻き込まれないように注意を呼びかけている。また、「他国の風俗、言葉を笑ったりするのは間違いである。笑ったりさげすんだりすると口論の元になる」と、忠告している。

道中は相宿が多く、「相宿では早くから相客の様子を観察すること」、「道ずれになったり、相宿になったら、信用がおけるようになって、食べ物や、薬などのやり取りをしないこと」、「相客に、薬などを安く売ると進められても、買ってはならない。薬屋で購入すること」と注意を怠るなどしている。道中ではさらに“雲助”や“置き引き”も多かった。

風呂の利用の仕方では、三項目をあげている、①空腹のまま風呂に入るな。空腹のときはとりわけのぼせやすいからである。②疲れたときは、熱い風呂に入れば疲れが取れる。③湯治場の場合は、硫黄分が多い場所の湯が多いので気をつける。大小の刀身などは外側までさびてしまう恐れがあるからと、注意している。

諸国の温泉 292 箇所

温泉に対しては特別に項目を設けている。特に、湯治としての利用であり、湯治の方法と注意が記されている。292 箇所の紹介は、湯治に行く人のほかに、旅の途

中や物見湯山など「一夜湯治」の人のためにも紹介するとしている。ただし、代表的な湯治場のみの効能の紹介である。

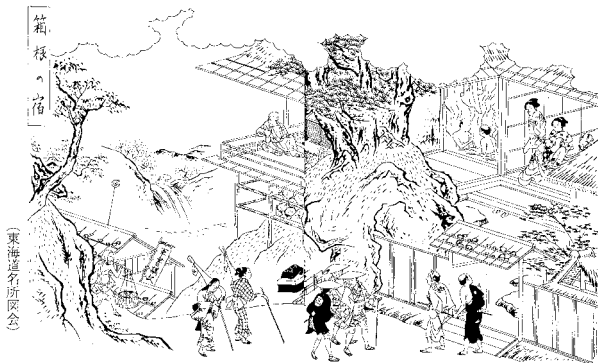
湯治の利用にあたっては以下の点に注意することと5項目を上げている。

- ①温泉の効能は、知らない温泉地では効能については、湯宿で聞いてから入浴すること。
- ②温泉が効くかどうかは、1-2 回入浴し腹がすいて食べた物が美味しいときは良く効く温泉である。もしも、腹が張って食欲が出ないときは病気に合わない温泉である。
- ③湯治の方法は、はじめの数日は1日に3-4回。体に合うようだったら5-6回。老人、虚弱体質の人は加減すること。永わらずらいの人は数回か1-2ヶ月の湯治をすべきである。
- ④熱くて透明で、鏡のように底まで良く見える温泉が最も良い。ぬるくてにごっている、変わった色をしているのは、上等ではない。
- ⑤1 箇所の源泉から数件の湯宿に分湯していても、湯宿によってそれぞれ違う効能をもっていることがある。湯宿によく問い合わせることであると、している。

諸国の温泉地は、292ヶ所を記述しており、江戸時代に存在していたことになる。ちなみに現在の温泉地は約3,000ヶ所になっている。五畿内、東海道、東山道（中仙道が中心だが奥州の一部も解説している）、北陸道、山陰道、南海道、西海道の温泉地について分けて解説しているが、代表的な温泉では湯治場の湯の効能について記述している。しかも、北海道を除き全国の温泉地（当時の行政区分で40カ国分の温泉地）を解説しているのは、驚異的なことである。湯治場が街道筋から発展したことを証明している。著者が全ての温泉地を訪れたとも思えないものの、江戸時代の温泉地の概要は明確になる。

この中で、東山道までの東の温泉地の記述が多く、西は少ない。例えば、南海道では、温泉地は、紀伊には、竜神、湯崎、本宮、出谷、川湯、二河の温泉。伊予の温泉では、道後のみ。しかも解説もない。このうち、現在も竜神、川湯、道後の温泉は盛んである。本宮は湯の峰温泉が知られているが、熊野本宮参拝のための禊の湯としての存在であり、神湯としての扱いであった。

江戸時代に命名されたといわれる日本の三名泉²⁾は、有馬温泉、下呂温泉、草津温泉である。有馬温泉を除き東の地域の温泉地となる。東の温泉地一下呂、草津温泉



入浴している様子、湯女らしき女性がお客を待っている様子が描かれている。

共に湯量は豊富である。また、五街道は江戸から分かれているが、奥州街道は会津の温泉、日光街道は鬼怒川、川治、那須などの温泉地、中山道は、草津、伊香保、四万の温泉地、甲州街道は下部、石和などの温泉地、東海道は、箱根、館山寺、西浦などの温泉地があり、これらに旅人も利用できた。政治、経済とも江戸（東京）になり日本一の人口があり、温泉の利用人口も多いことになる。温泉地も東の温泉地が選ばれている背景があるものの、自然と一体となった温泉がほとんどであったろうと予想できる。

温泉利用にあたって

温泉利用の注意点は前述にある4項目であるが、このうち②と③は現実には合わないだろう。

②は入浴してから食欲が増すかどうか、である。一般的には健康体の人ならば入浴後は食欲は出るはずである。

③の1日に3-4回の入浴はともかく、5-6回の入浴では、病状、温泉の成分、温度、入浴時間にもよるが入浴すぎの嫌いがあるだろう。身体が虚弱体質の人は、加減しなさいとしている点は当然であろう。

①と④は注目される点である。①は現代では、温泉分析表が義務図けられているのでわかりやすい。江戸時代では、温泉別の効能が優先していたものの、たちどころに効き目があるかどうかは定かでない。しかし、今日、温泉の効能書は使用されない。

④の熱くて透明で鏡のように底まで見える温泉が良い。ぬるくてにごっていて、変わった色をしているのは上等ではない、としている。現代人も熱くて透明な湯が

好きであり、温湯はあまり好まれない傾向にあり、江戸時代と変化はない。ただし、色つきの湯—白骨温泉や乳頭温泉は色で人気の温泉であり、今日では上等でないとはいえない。むしろ、わざわざ色つきの入浴剤を加えていた温泉も出現している時代にある。

ただし、江戸時代の温泉は「源泉かけ流し」がほとんどであったことは想像に難しくなく、温泉の成分は十分に体にアピールしたはずである。その点、現代の温泉とは比較できない。

古川柳で見る温泉利用

古川柳とは、江戸時代に柄井川柳（からいせんりゅう）によって編集された五七五の17文字による短詩文芸である。作者は庶民で、庶民による投句を集めたものである。投句の中から優秀な句を柄井川柳が選び「川柳多留」（せんりゅうやなぎたる）として編集したものである。柄井川柳の川柳は、古川柳か、江戸川柳とよび現代のサラリーマン川柳や時事川柳と区別されている。

川柳は、穿ち、批評、エスプリを基調としている。川柳の対象は生活、社会、政治、歴史など多岐にわたっている。この作品の中で温泉をテーマにした句もある。湯治での有様や、湯治以外の利用についての作品が残されている。この古川柳によって江戸庶民の楽しみの一つ温泉の利用の実態が明らかとなる。

●「草津の湯 とかく女房は ふのみこみ」

草津の湯といえば、三名泉の一つとして有名である。しかも、瘡、性病に効く湯治場としても有名であった。この湯治場に亭主が行くというのである。女房にとって見れば何でそんなに遠い湯治場に行かねばならないのかと、疑心暗鬼なのである。「ふのみこみ」と理解できないとしているのである。

●「しゅうとへも 草津へいくは 秘し隠し」

本当は性病治療のための草津温泉への湯治に行くのである。しかし、あらかじめ草津へ行くとは姑にはいえないため、隠しに隠し続けているのだが…。

●「ほしがって 嫁は遠くの 湯へ入り」

温泉の効用は子室に恵まれる点にある。さらにうわさの高い温泉、それも遠方にもかかわらず、嫁は子室によければ出かけていくという。

●「湯治場で 何にもできない 残念さ」

この句は湯治に来たものの長逗留であり（通常二め

2) 三名泉の他に三古湯（有馬温泉、白浜温泉、道後温泉）がある。

ぐりから三めぐりの逗留)、趣味のない者にとっては、かえって湯治の長逗留は時間をつぶすことが大変だった。“こんなときこそ趣味があればいいものを”と残念がっている。

●「一二目 強くなってる 湯治帰り」

長逗留の湯治は、逆に趣味のあるものにとっては楽しい。囲碁のできるものは、毎日の練習で帰えるころには、一二目(碁の用語であり碁では一目、二目勝ちという)は確実に強くなっているという。

●「三味線の かわりに枕 そっと出し」

逗留で、三味線引きが来たので慰みによんだ。ところが、三味線の変わりにそっと枕を出したのである。湯女ばかりか風俗の女は逗留客に的を当てており、決して逃がさない。

●「むかえ湯に 来たりな寄りな 軽井沢」

中仙道の軽井沢あたりの湯治場帰りである。飯盛り女か湯女かが、「次はいつ来てくれるの、待てるからね」と名残を惜んでいる。きっと、湯治中に世話になった女性であろう、そんな湯治客が多かったであろう。

●「湯治以後 達者になって 遊ぶなり」

湯治帰りのものは元気である。さらに元気に遊ぶという。それほどまでに、湯治の効果が高いものだとしている。

●「湯もどりに 赤木つくりを 百でぬき」

箱根で湯治をした帰りに、箱根権現様に参拝し、宝物の赤木作り(工藤祐徑が箱根権現で授けた名刀という)を百(文)も払って拝観したという意味である。湯治の帰りに神社仏閣を参拝する、あるいは神社仏閣の参拝の帰りに湯に入ることが旅の定番コースなのである。

●「そのように 温泉にも行かれぬ 秋の暮れ」

温泉に行き病気がよくなったというが、自分の境遇

では湯治場など到底行けないと言う概嘆である。その寂しさは秋になると、とくに感じられるのだと言う。

江戸時代の庶民の温泉利用は、古川柳では病気の治療用一特に性病の治療に利用し、子宝(妊娠促進)用に利用し、さらに神社仏閣の参拝後に利用していることが明らかであり、碁をやったり、たまには三味線を聴いたり、帰り際でも、熱い送りの女性がいたのである。庶民にとって湯治場への旅とは、ゆとりの時間を楽しむところでもあり、憧れでもあったといえる。

資料・文献一覧

- 江戸時代, 北島正元著, 岩波新書, 41年1月発行
- 江戸時代, 大石真三郎著, 中公新書, 99年9月発行
- 都市図の系譜と江戸, 小澤 弘著, 吉川弘文館, 02年2月発行
- 旅行用心集, 八角蘆庵著 1810年発行
- 旅行用心集, 八角蘆庵著 桜井正信監修, 八坂書房, 01年6月発行
- 観光旅の文化, 北川宗忠著, ミネルバ書房, 02年4月発行
- 江戸の女たちの湯浴み, 渡辺信一郎著, 新潮社, 96年10月発行
- 俳風柳多留, 浜田儀一郎監修, 社会思想社, 85年3月発行
- 俳風柳多留, 山澤英雄校訂, 岩波書店, 85年3月発行
- 柳多留名句選, 山澤英雄選, 岩波文庫, 95年8月発行
- 温泉につぼん, 山川正美発行人, 古川柳で見る温泉(安達清治), JAF出版, 05年2月発行
- 江戸川柳で見る江戸の旅人, 安達清治著, 遊企画出版, 07年3月発行
- 東海道名所図会一箱根の宿, 竹原春扇斎・画, 寛政9年発行
- 日本風俗史一旅風俗(3巻), 発行者・長坂金雄 雄山閣出版, 1959年発行